

まちなみの歩みを振り返る

◇新冠町の沿革

明治時代のはじめ頃、新冠は高江の他、10の村（地域）で成り立っていました。これら地域を統括する役場として、明治14年（1881年）に戸長役場（現在の町役場）が初めて設置されました。新冠町では、この年を「開町の年」としています。

今年はその年から数えて140周年を迎え、昭和36年に「新冠村」から「新冠町」へと呼び名が変わった町制施行から60周年という意義深い年です。

先人が不屈の開拓精神と郷土愛に燃え、厳しい困難を乗り越えて築かれた偉大な遺産「にかつぶ」。

今日、私たちはこの偉大な遺産の恩恵を受けながら毎日を暮らしています。広報にかつぶでは、この愛すべき郷土「にかつぶ」の名の由来や歩みと足跡、現代の様子などを紹介していきたいと思っています。

「新冠」の由来

新冠に人が住むようになったのは、今から数千年以上さかのぼった縄文時代からと言われています。その後、長い年月を経ながら本州の文化も少しずつ入るようになり、「アイヌ文化」が成立していきます。

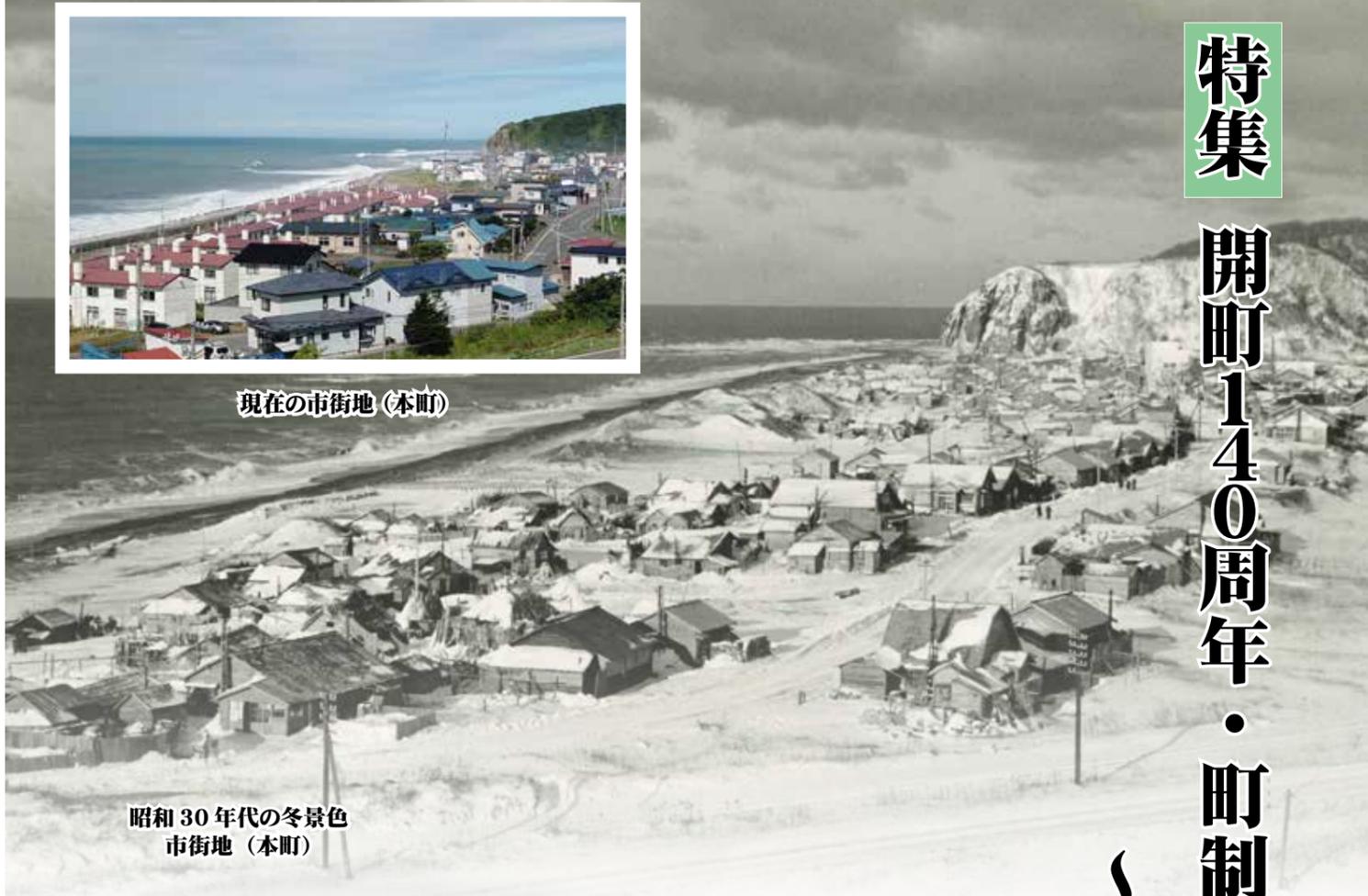
江戸時代、現在の新冠辺りはアイヌ語で「ピボク」と呼ばれていました。これは「岩の陰」という意味で、海の近くにそびえたつ大きな岩山「判官館」のそばをさしています。

記録によると、西暦1700年代からアイヌ語の「ニカプ」と呼ばれることが多くなりました。これは「ニレの木」の意味で、当時のアイヌ民族がこの木の皮の繊維から衣服を作るなど、ニレの皮をよく使用していたことに由来しているといわれています。

やがて、「新冠」の文字があてられ、現在に至っています。



現在の市街地（本町）



昭和30年代の冬景色
市街地（本町）

「新冠場所」について

江戸時代、慶長年間（1596～1614年）に、松前藩は蝦夷地の各所に「場所」という建物を設けました。これは、地元のアイヌ民族と本州の和人が交易をする所です。新冠においては、判官館の海に面した所に「新冠場所」が設けられました。開設した年代は、はっきりと分かっていませんが、寛文9年（1669年）におけるシャクシャインの戦いの際には、新冠場所があったことがうかがえます。場所はやがて「会所」と呼ばれるようになり、交易の場と併せて漁業を大規模に営むようになります。

会所には、旅人が宿泊する所や神社、移動のために使っていた馬が休む厩舎などもあり、まさに江戸時代における新冠の中心といえる場所でした。

明治になると、「本陣」↓「旅籠屋」↓「駅通」と名称を変え、明治15年（1882年）に新冠会所はその役目を終え、建物は明治32年（1899年）に解体されましたが、新冠会所に勤めていた武士のお墓は今でも残っており、江戸時代の名残をしのばせています。

新冠場所・会所があった判官館は、幾多の時代の変遷の中で厳然とその雄姿をほこり、今も私たちの故郷として生きつづけています。



会所に勤めていた武士のお墓
『会所墓石』（判官館海岸沿付近）

新冠の歩みと足跡

明治2年（1869年）、北海道に開拓使が置かれ、呼び名も蝦夷地から北海道へと改められた時、全道は11カ国86郡に分けられ、ここに日高国新冠郡が誕生しました。

明治時代では、新冠はすでに「新冠牧馬場」（後の御料牧場）という軍馬や農耕馬を生産、飼育する土地として広く活用されていました。牧場以外の海沿い付近は、徳島県、広島県、滋賀県などといった所から移住者が入地し、次第に市街地化が形成されます。役場をはじめ、学校や郵便局、駐在所が設置され、住民が生活できる基盤が形成されていきました。

大正時代になると、節婦を中心にサケ、コンブ、イワシなどの漁業も盛んになり、大きな漁場が繁栄期を迎えていました。これにより、節婦の人口は増え、賑わいを見せます。大正から昭和に移り変わるころになつてようやく鉄道が開通、新冠と



町制施行 祝 開町80周年
パレードの様子

昭和40年代から、夏は冷涼で冬は積雪が少ないという地の利を活かした軽種馬生産が盛んになり、ハイセイコーをはじめ多くの有名馬を輩出

する競走馬のふるさととして、全国的にも有名になりました。

平成時代は市街地再開発によって、本町地区をはじめとする街並はきれいに近代化されました。また、競走馬のふるさととして、牧場地帯をサラブレッド銀座と呼称、駐車公園やさわやかトイレの設置など、全国の競走馬ファンから親しまれるようになりました。

平成9年（1997年）には、新冠町聴体験文化交流施設「レ・コード館」がオープン、以来、各種コンサートやミュージカル、吹奏楽クリニック、ジュニアジャズバンドなど「レ・コード」と音楽による町づくりを推進し、全国的に見てもユニークで活発な活動をしています。また、新冠温泉レ・コードの湯もオープンしたとともに、学校の統廃合に伴い、美術館や老人施設への転換も図り、さらに定住移住促進にも力を入れていくことから、日高管内で最も人口減少率が少ない町として注目されています。

新しい令和時代、好調を続けるピーマン生産や診療所の入院病床再開、学校給食の無料化、光プロードバンドサービスの整備など、時代のニーズに呼応した町づくりが展開されています。「思いやりと笑顔にあふれた新冠」の実現に向け、どんな未来がこれから待っているのでしょうか。